
 学 会 記 事

第58回新潟癌治療研究会

日 時 平成11年2月27日(土)
午後1時30分より6時30分まで

会 場 新潟東映ホテル
1F 白鳥の間

I. 一 般 演 題

1) 口峽咽頭癌16例の治療成績

星名	秀行	高木	律男
鶴巻	浩	長島	克弘
宮浦	靖司	藤田	一
宮本	猛	相馬	陽
大橋	靖		(新潟大学歯学部) (口腔外科学第二講座)

当科開設以来24年間に経験した口峽咽頭癌16例について治療成績を検討し、報告した。

対象・方法：年齢は49歳～83歳，平均66.3歳。組織型は扁平上皮癌が14例，疣状癌，上皮内癌が各1例であった。TNM, Stage (St)分類：T1・6例，T2・3例，T3・4例，T4・3例，N0・7例，N1・5例，N2b・2例，N2c・2例，全例M0で，StI・6例，StII・1例，StIII・4例，StIV・5例であり，進行例が過半数を占めていた。治療は手術を6例（全例StI），放射線療法を6例〔StIII・4，StIV・2（温熱療法併用）〕，手術＋放射線を4例（StII・1，StIV・3）に施行した。Cause Specific な累積生存率をKaplan-Meier法にて算出した。

結果：全例の生存率は3年で79.5%，5年で69.6%であった。St別5年生存率：StI・IIは100%，StIIIは75%，StIVは30%と低下がみられた。治療別5年生存率：手術群は100%，放射線群は83.3%，手術＋放射線群は0%であり，進行例に対する治療の困難性がうかがえた。また，低分化型ないし瀰漫性浸潤癌は頸部転移率が高く，5生率は30%と低下がみられた。

2) 顎口腔領域における腺様嚢胞癌の臨床的検討

田中	彰	岡田	康男
佐藤	光	石原	修
武田	幸彦	岡野	篤夫
森	和久	又賀	泉

(日本歯科大学
新潟歯学部口腔外
科学教室第2講座)

1975年から1996年の22年間に日本歯科大学新潟歯学部附属病院第2口腔外科にて治療をおこなった腺様嚢胞癌患者19名を対象に，治療ならびにその予後を中心にretrospectiveな検討を加えた。発生部位は口底8例，上顎洞4例，顎下腺3例，硬口蓋2例，下顎骨1例，舌1例であった。組織型亜型はcribriform typeが13例，solid typeが5例，tubular typeが1例であった。初回治療内容は手術療法が18例，94.7%に行われていた。局所制御状況では全体の31.5%に局所再発を認めた。後発転移状況では11例，57.9%に後発転移を認め，うち10例，90.9%が肺転移であった。腺様嚢胞癌症例19例の累積生存率をKaplan-Meier法で算出すると，5年生存率が67.6%，10年生存率が49.3%であった。また後発肺転移をきたし担癌のまま長期経過をたどっている症例も少なくなく，今後も長期経過観察を要することを再認識させられた。

3) 当科における40歳未満の口腔扁平上皮癌患者の臨床的検討

中條	智恵	高田	真仁
新垣	晋	中島	民雄

(新潟大学歯学部口
腔外科学第一講座)

1970年6月から1998年12月の28年7ヶ月間に当科を受診した40歳未満の口腔扁平上皮癌12症例について検討を行った。初診年齢は26歳から38歳までで平均34歳。性別は男性7例，女性5例。発生部位は舌が6例，下顎歯肉，上顎歯肉，口底が各1例，下顎中心性癌が3例であった。T分類は，T1，5例，T2，T4が各2例であった。N分類はN0，7例，N1，2例，N2b，2例，N2c，1例。M分類は全例M0であった。臨床病期は，Stage I，5例，Stage II，IIIが各1例，Stage IVが5例であった。治療として，外科療法が11例，放射線療法が1例であり，全例に化学療法を併用していた。予後は経過良好9例，腫瘍死3例であり，Kaplan-Meier法による5年累積生存率は74.1%であった。今回，若年者口腔癌の発症誘因と初回治療法の選択について検討した。